自力と疑い　浄土真宗（５７９頁）

「自力の心のある間は不安がある、不安の心を疑いと言うのですが、自力が尽きた時、同時に疑いは晴れるのです。―　自力がすたったときには、疑いは晴れているのです。自分の計らいの心が自力です。計らいがつきて親に計らわれていたと気がついた時は、他力に生かされているのですから、疑いは晴れて明信仏智になっています。明信仏智にならない前を、疑惑仏智というのです。その関所を「一念の信定まらん輩は」というので、そこで信前信後の水際が立ち、真仮の分斉を鮮やかに諦得さしていただくのです。そのときが、二種深信が徹底したというのです。いわば、自力と疑いとは不即不離で、自力の正体がある間は、疑いの影があり、疑いの影の無くなったということは、自力の正体が浄尽したということですから、自力の心を振り捨ててといわれたので、正体の自力がすたったら疑いの影はなくなるの

です。

疑い（本願疑惑）　信仰に悩める人々へ（２９頁）

仏法を求めて始めの頃は、善知識も選ばず、誰様の御話を聴いても、成程成程と合点出来るのです。聞けば聞く程、ありがたくなって、疑う余地は微塵もなく素直に喜んでいるのです。こんな易い他力本願を、人様は何故信じ切らないのだろうか。私は今死んでも往生に間違いはない。私は間違い通しても、間違わさぬ仏様が御承知だからと安心し、これもご恩ご恩と有頂天になっているのです。

だんだん深みに入りますと、自分の魂の醜さがありありと見せつけられます。どうも貰えたのでないような気がいたします。も少し何とかならないかともがくようになります。この機

ははっきりするものでないと聞きながら、も少しは変わりそうなもの、はっきりしそうなものと進まずにおれません。この機を見ては千年経っても晴れられないと言われるけれども、晴れなければ、疑いが切り払われなければ、往生は不定ではないかとあやぶまずにはいられないようになります。

どこの知識に持ち出して話しても、疑うては救われない、素直に法のお手元を仰げばよいではないかと叱られます。叱られても怒られても、見ずにおれない「ひょっと」の心が出て来ます。

疑いとは、真宗では本願疑惑をいうのだから、晴れてない人はみな疑いなのだ。学問理屈を知ったのでなく、真仮の分斉、信前信後の水際、宿善の開発の角目を体験していない人

は、みな疑いの行者だ。疑いを疑いと知らないのは疑いが晴れたのではないぞ、必ず生死の巌頭に立てば、往生いかがの不安は出るぞ。（信仰に悩める人々へ　下巻９３頁）

疑いとは、私は宗教を疑うてはいないと、簡単に考えているそんな粗雑な疑いは本願疑惑とは言わないのだ。何年聞かされても晴れたも暮れたもわからない心、助ける法のお手元にはちょっとも疑いはないのに、自分の機に戻った時、どうも、そうはおっしゃるけれども、ひょっと堕ちはせんか、なんとかならんか、薄紙一重がと、本願に向き、往生に向き、お浄土にむき、二の足ふんでいるのがみな疑いなのだ。この疑いは自力の断除されたときでなければ晴れないのだ、晴れた時は摂取されているのだ、摂取された時は、自力は他力に変わっているのだ。（１３４頁）

昭和の歎異鈔　７７頁

「疑いの中にいて、疑いを知らないのです。どうもはっきりしない、ひよっと堕ちはしないか、これでよいかしら、何とかなりそうなもの、薄紙一重が除かれないと、自分の心を見た時に心配が出るのが、疑いと知らないのです。

助けて下さる法を見て疑うものはおりませんけれども、出て行く後生となって機を見るとき、危ぶみのでるのが疑いです。それを見ると、始末がつかなくなるから、機を見るなみるな、機を見ては千年経っても夜は明けないとおそらかして見ないだけですから、見ないだけで晴れてはいないのです。往生の望みが絶えて、疑いなく堕ちたときが（絶対の悪）疑いなく助かったとき（絶対の善）、仏凡一体になったときでなければ、晴れた自覚はないのです。

自力のなかにいるから自力を知らない、疑いの中にいるから疑いを知らない、これを不了仏智とも、疑惑仏智ともいうのですから、明信仏智との区別がつくはずがありません。